

「日本国語大辞典」によれば、「面倒」という日本語はもととは「体裁がわるいこと」「見ぐるしいこと」といった語義を持っていたが、一六世紀あたりから「するのがわずらわしいこと」「わずらわしく感じられること」「くどくでうるさいこと」といった意味での使用が見られるようになり、一九世紀以降、用例も増える。そこに含意されていたのは「無益に物を浪費すること」「むだになること」との意で、回りくどい手続きの煩わしさのようなものが、日本語でも表現を得ていったと考えられる。第六回でも見たように宗教関連の儀式や慣習は、もともと高邁で崇高な精神的意味を持っていても、形骸化すれば単なる煩わしい手続きとなる。ヨーロッパでも一五世紀から一六世紀にかけてはそうした状況に批判の矛先が向けられ宗教改革へとつながった。近代を前にして日本でも西洋でも、技術の進展とともに細かい形式やシステムへのこだわりが洗練されたが、このような「こだわりの文化」は同時にそうした形を疎ましく思う感性をも生み出した。

こうした流れを見てもわかるように、同じ権力でも事務はそれまでの権力とかなり異なる顔を持つ。人類の長い歴史の中で君臨してきたのは、巨大で崇高なものが喚起する恐怖や畏れなどの感情を支えにした権力だった。これに対し事務の力を支えるのは、巨大さや激しさからはほど遠い些末さや細かさである。「面倒くささ」こそが、その力の

源泉なのである。むろん、此末で細かいことが悪いわけではない。むしろ些末で細かく、退屈で卑小であるおかげでこそ達成される価値というものがある。安定。やさしさ。継続。平和。人がそうした価値に重きを置くようになったことと、事務という新しい権力が人々を拘束するようになったこととは切り離すことができないだろう。波乱を嫌い、ルーティンを受する人間の習性が、事務の誕生によってより前面に出てきたのである。

そんな中で育まれたのが、一見呪わしく疎ましい事務の、逆説的な魅力だった。人は事務という権力の誕生とともに「面倒くささ」に苦しめられることになったが、この「面倒くささ」に淫する心性をも開拓していく。事務に伴う「こだわり」「几帳面」「細かさ」「徹底」といったスタンスを磨き上げること、*「わざわざ面倒くさくある」というライフスタイルが実践されるようになった。*

もちろん、そうした事務愛が開拓される傍らで、事務の「面倒くささ」をあげつらい、ときには否定したり見下したりしようとする動きも常に見られる。現代日本でわかりやすい例をあげるとするならば、たとえば「鉄ちゃん」（鉄道愛好家）や「オタク」に対する揶揄があげられる。鉄道愛好癖にしてもアニメ等を対象にしたオタクのさまざまな活動にしても、その情報収集へのこだわりや徹底した行動のシステム化が、必ずしも何らかの功利的な目的の追求に資するものでないだけに、そのこだわりの自己目的性が戸

gunzou. 2022.12



題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部公彦		
No.	7.	副題	事務を呪う ディケンズ
備考			

「面倒くささ」の発見

事務に文句を言う人が必ず理由にあげるのは「面倒くささ」である。事務が歴史を動かす大きな力として注目されるようになったのは一八世紀から一九世紀にかけてだったが、この頃から事務はさまざまな形で人間の行う活動に介入してその存在感を示し、その煩わしさや疎ましさで人々を苦しめるようになる。人々は事務を通し「面倒くささ」という心理と出会ったと言ってもいい。第一回でも触れたフランス語の「官僚主義」(bureaucracy)の誕生と相前後して、英語圏でも red tape や paperwork といった既存の表現がそれぞれ新しく「過度の事務的な細かさ」(一八世紀)、「書類仕事」(一九世紀)といった意味を持つようになり、事務仕事の煩わしさを指し示した。煩わしいのに必要で、逃れることができない。そんな状況はあらためて見渡してみれば人間生活や社会のあちこちで確認できるだろうが、事務の「面倒くささ」ほどそうした呪縛を強く突きつけるものはない。とりわけ細かい些末なことに注意を向けさせ苛立たせる傾向は事務特有のもので、そこには労力を要するとか、迷惑だ、といった広い意味での疎ましさを示す言い回しだけでは説明できない独特な心理がからんで

惑いを呼ぶことがある。  
「オタク」という呼び名は、一部のSFファンたち（慶應義塾幼稚舎出身者というのが定説）が相手を呼び合うのに「お宅」という尊称を用いていたのが始まりと言われている。一九八三年に中森明夫がそれを現象として名指したことで一種の差別化の用語として定着し、まもなく「アニメやマンガ、ゲーム好きな奴」、イコール「ずっと家にいて暗くて人付き合いの悪い奴」という誤解が生まれた。その後、「オタク」をめぐる議論は深まりを見せるが、もとの出発点にあったのは彼らがきわめて高度で精緻な、しかし、非常に趣味的な情報の収集・整理を行うということとだった。岡田斗司夫は「オタクの黎明期」を次のように振り返る。

「……」実はオタクが数・質ともにぐっと成長したのは、ビデオデッキの発売以降のことなのだ。

ビデオデッキの発売前に既にオタクだった奴らがいいた。ごく少数のこういった人たちが、今では考えられないような苦勞をしながらオタク道を極めていたのだ。

オタクの黎明期、ビデオはもちろんアニメ誌すらこの世にはなかった。

それでもただ何となく、同じように見えるアニメの中に明らかに違うものを感じ、その差がどうやらス

タッフと関連があるらしいことに気がつく「原オタク人」たちがいた。彼らは必死で目を凝らして、大学ノートにスタツフリストを写し、その関連を研究した。  
このように近現代の社会では、事務的な作業を要する細部へのこだわりを「面倒くさい」とする態度が広く見られる一方、その「面倒くささ」をものともせず、あるいはまさにその「面倒くささ」ゆえにこだわりを邁進し、作業を愛してしまう境地が存在する。よりややこしいのは、自分が「面倒くさい」と思うだけでなく、他者のこだわりをも許容できずに「謎」とか「キモイ」といった言葉で揶揄する動きもあることだ。事務をめぐるこの複雑な絡み合いは、文学作品の格好のテーマとなってきた。

### 『荒涼館』の事務地獄

チャールズ・デイケンズは英国社会が事務の隆盛を目の当たりにする中で、いち早くその呪わしさを描き出した作家である。その代表作『荒涼館』は、今に至るまで類例がないほど事務への呪詛にあふれている。まさに究極の「事務呪い小説」だと言えよう。

この大型長編ではいくつかのメインプロットと、無数のサブプロットが併走しているが、ストーリーの上で大きな波瀾要因を生み出すのは、レディー・デッドロックの過去。しかし、『荒涼館』をデイケンズ作品の中でも圧倒的なものにしてるのは、必ずしもこうしたプロットではない。この作品には、いったいこれは何だろうか？ と言いたくなるような不思議なこだわりがある。ほとんど神秘的と言つていいほどの執拗さで繰り返される事務への呪詛である。呪われているのは、「ジャーナリス対ジャーナリス」と呼ばれる訴訟事案とこの訴訟をめぐる発生する事務作業であり、さらにはそうした終わりなき作業を引き起こす裁判制度そのものや、関係者を食い物にする法曹界の人々の寄生的な振る舞いである。

訴訟は相続にかかわっている。ジャーナリスという人物が莫大な財産を築き、その財産を残すにあたって遺言書を作成した。しかし、相続をめぐるこの裁判は延々と決着がつかず、財産の相続が予想される人々には、裁判費用の負担ばかりがのしかかる。その実態をジョン・ジャーナリスは、自分が後見人を務めるエスターに対して次のように説明する。

「……」不運なことに、さるジャーナリスが莫大な財産をきずいて、りっぱな遺言を作成した。ところが、その遺言のもとで信託財産がどのように運営されるかを決定する議論のために、当の遺言によってのこされた財産はほとんど消費されていった。遺言で指定された遺産相続人たちは困窮へとおいやられ、かりに

である。広大な領地を保有する貴族と結婚した彼女は、今や押しも押されぬ上流階級の貴婦人だが、実は秘しておきたい過去があった。読み終わってみれば（つまり、読んでいる途中では必ずしもそうは感じないのだが）、彼女の人生のストーリーはともわかりやすい型にはまっている。若気の至りで関係を持った男性。その結果身ごもった子供。二人とも今、どこにいるのか、生きていのか死んでいるのかもわからない。彼女がしばしば陥る深い憂鬱は、英国リンカンシャーならではの陰鬱な気候によって引き起こされているようにも見えるが、実はこの過去がトラウマとなっている可能性が大きい。夫や周囲の者は、彼女がそんな過去のトラウマを抱えているとはつゆ知らない。しかし、ふとした運命のいたずらから、彼女はこの過去と面と向かわなければならなくなる。

典型的なヴィクトリア朝メロドラマの展開である。第五回でも触れたように、「過去の過ち」が暴露されることで女性が転落の道を進むという筋書きは、一九世紀の小説作品で頻りに用いられたもので、当時の抑圧的な倫理観ともあいまってヴィクトリア朝ならではの価値意識を反映するものとなった。「墮ちた女」の「プロットと禍々しい犯罪が組み合わさる」という展開は、『テス』などの例にも見られるように、大衆的と呼ばれるような作品に限らずさまざまな作品で形を変えて取り入れられた。そこには当時の読者や書き手の嗜好が表れ出ていた。